

その十

具体的な例を二つほど挙げて説明します。まず最初は道路災害復旧工事です。工事箇所は、その年に三度に渡って崩壊を繰り返していました。工事内容は、県道山手側の斜面を現場吹付法砕工で復旧し、その下端に落石防護柵を施工するというものです。高知県の道路は、そのほとんどが山岳道路であり、この現場もご多分に漏れません。幅員は狭く、通行制限（50分止め10分通行可）を実施しないと施工は出来ません。ところが工事時期が地域（高知県北川村）の特産品である柚子の出荷最盛期と重なり、そのまま工事を行えば、地域住民に大きな負担を強いるのは明らかでした。ここまでは誰が考えても簡単に分かります。こんな場合、それまでの私の考えはこうです。

災害で傷んだ道路を復旧するのは何よりも優先されなければならぬ。私たちはその使

命のもとに仕事を。住民にもまたそのことを優先してもらおうとする、そのためには住民が我慢をしなければならぬ。しかし、この工事に着手する前の工程検討会で、私たちはそのような視点には立たず、まず、「どのように入工を進めていくことが住民の負担を少なくすることが出来るのか」を最重要課題として検討しました。検討した結果は、地域の基幹産業がまず優先されなければならぬ、出荷時期には入工を中止するが、緊急性を考慮し法枠吹付までは中止期間までに完了させる、というものでした。そしてその方針とスケジュールを戸別訪問で住民に伝えます。工程はタイトなものになり、途中何度かアクシデントも発生したのですが、最終的には予定通りに完成します。住民からは逆にこんな言葉をもらいました。「あんならワシらのことを考えてくれるんだから、ワシらも出来ることは協力する

ぜ
」
。